

---

# 極道の花婿くん

佐東

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

極道の花婿くん

### 【ノード】

N1937Z

### 【作者名】

佐東

### 【あらすじ】

すべての原因は、僕が平凡な人間で、庭師の息子だったことにあらるのだ……「俺のことを好きと言え」って、何が悲しくて脅迫されて男に告白！？ 一般ピーポーによる、極道の偽りの花婿としての波瀾万丈な日々が始ま……らないでほしい切実に！ そう、始まらないよう阻止したい物語。ラブよりコメディをとりたい。うすらB.L.。

## 脅迫された

とある理由で、僕が不幸な人生を歩むことになつたのだと思つと、僕は僕をうんだ両親を恨まずにはいられない。

すべての原因は、僕が平凡な人間で、庭師の息子だつたことにあるので。

「……今まで、隠してたけどな」

通い慣れた極道屋敷の庭で、いつも通り父さんの手伝いをしていた。最初は恐れ多く、脳細胞が死滅しそうなほど緊張したものだつたけど、たくさんの出入りする極道の方々は一般ピーポーである僕たちなんかこれっぽっちも眼中が無いと分かると少しほは樂になつた。近くに縁側があつて、奥の畳部屋でなにやら重大そうな会議が始まろうとしていても、腰を落とした強面のおじさんたちの間を厳格のあるじーさんがのつそりと歩いてこようとも、言葉の端々に血なまぐさい単語を織り交ぜ、緊迫した空気を演出していくよりも。

……ああ、平和だ。

空を優雅に飛び回る鳥を見上げつつ、額の汗を拭う僕。いつの間にか、現実逃避が上手くなつっていた。

「俺は……」

だから、ジーさんの向かいに立つた男が強く何かを主張していたことにも、その内容が少し特殊だつたことにも、それから、じひらに向かってきていることにも、気が付かなかつた。

僕は、残念ながら気が付いていなかつたのだ。

「真央つ」

「……あ、え、何、父さん？」

慌てて手元から目線をはがし、父さんの指さす方を見る。着流し姿のすらりとした体格の男が、ちょつと僕に手を伸ばすところだつた。腰をぐつと引き寄せられ、手にしていた剪定ばさみを取り落とす。

何も理解しない僕に、おじさんたちの驚愕の眼差しが突き刺さる。なんか、誰かと、密着してゐる。

……うん、どうにつけと?

ぎぎぎと首を回して見上げたら、すつと通つた顎筋が目に入った。一切こひらには目を向けず、決意のこもつた眼差しでその先を見ている。

見たこともないような綺麗な顔に見とれ、僕はまた疑問を忘れていた。

「俺は、女になんて興味はねえ。俺が好きなのは、こいつだ！」

一瞬にして我を取り戻した。

呆然とする父さんはもちろんのこと、世界の終わりのように絶望にくれる強面のおじさんたち、何故か強気でどうだ分かつたかと胸をはるこの謎の男を前に、まずは説明が欲しいと冷静なのが、この僕。

今しお愛の告白をされたような気がするのだけど、なにぶん今まで関わったことのない人だし、それによりによつて怖い関係の人だし、それどころか男同士だし。

現実に真っ向から受け止めることはできず。

眉をひそめて見上げ続ける僕の視線も、いまだ受け止められない。

「何を、言つておる。お前には早く妻を持ち、わしの跡を継いでもらわねばならんのだぞ。そのよつな戯れ言を聞いている場合ではない」

「だから嫁はまだいらねーんだよ。んなほいほいと結婚できるか」「これはこの小笠原組が出来てからの決まりなのじゃ。跡を継ぐためには、妻の支えが無ければならん。人の上に立つ上で大事なことなのじやぞ」

「俺は俺一人の力で組を率いてみせるー 古いしきたりなんぞ知つたこつちやねーんだよ」

「ココウー。」

……なんか親子げんからしきものが始まつたぞ。怖え。この人が力こめる度に僕の肩がミシミシりつてんだけど。痛え。

それはそうと、話の内容からものすゞく恐ろしげな全貌が見えてきた。

組がどつの、跡を継ぐだのなんだの、妻だのと……これ、結構テリケートな極道の話じやね？

「だから、俺は、今こいつしか眼中にねーんだよ。」

その渦中に、なぜ、僕が……！

こいつしか眼中にねえって、こいつだけは眼中にねえの間違いじゃない！？

「女と結婚なんかしねえつていつてんだろ！ 僕はこの男以外認めん！ 絶対に認めん！」

この人、明らかに僕のことダシにしてる！

「あ、あのー！」

分かつてしまつたマヌケな真相に、僕は抗おうと勇気を振り絞つて声を上げる。言い合つていた二人は最初ひたすら気付かなかつたけど、何度か大きな声を出す内にやつと言葉が届いた。

「ほ、僕、帰つていいですか……？」

「そうだ、おまえさんからもリュウに言つてやつてくれ。分家の娘たちから早く嫁を召し上げると」

「しねえつて言つてんだろ頑固じじい。おい、おまえ、俺が好きなんだろうー。」「そりじゃなくて……」

「そりじゃなくて……」

誰も聞いてねえしな。

僕、どっちの味方になるつもりもなければ、自分の平凡な人生を守りたいんですけど。

「ああ？」

「ああ！？」

「ひいいいつ」

しかし、お一人から鋭い眼光で睨まれ、亀のよつにきゅつと首を引っ込める。

え、えええ、どうすればいいのー……？

助けを求めて、父さんの方を見れば、すでに忽然と姿を消していった。父さん、今僕は、あなたから生まれたことを激しく後悔しました。

「……いいから、おまえ、俺のこと好きと言え」

泣きそうになる僕の耳元に突如暖かい吐息がかかる。囁かれた言葉はこれまた恥ずかしいものだった。

なにこれ、ほんと、何プレイ？

この場はどうあれ、艶めいた仕草に我知らず顔が熱くなる。そして俯くと、聞こえてるのかと顎を引き上げられ無理矢理顔をあわせられる。

ひーつ。

やめる、その顔はあなたの武器ですか。綺麗と表現するに何の間違いない端正な顔立ちに、男の僕でさえ息が詰まる。断じて言うが、僕にはソッチの趣味はねえ。

「言わないと、強引にでも証明してやるわ」

顎を掴まれたまま、強引に顔が迫つてくる。こんな脅迫つてあるか？ 今なら、殺してやると言われるよりもやたらリアルに恐怖を感じる。

僕はすぐに喉から声を振り絞った。

「僕も心からこの人を愛しています！」

妙にクサイセリフ出た。

## こちやつかせられた

そこから、僕と不良の不思議な関係が始まった。

いや、始まってしまった、と言う方が正しい。だって僕は微塵も望んではないのだ、年齢＝彼女いない歴だろうと、高校生は青春を謳歌しろと校長先生が言っていたとしても、それこそこの状態をクラスメイトの女子に羨ましがられていようとも。

……だつて、なあ？

相手は、極道の若頭で、男だ。

「お前も立派な人間になつたものだなあ。小さなこりは、セーラームーンとケッコンするとか宣言してたくせに」

そう言つことは蒸し返すなよ。

クラスメイト兼、幼き頃からの親友である慎太郎が茶化すでもなく半ば本気な面もちでそう言つてきた。

ちなみに僕は小さな頃から強くてかわいい女子が好きである。自分が弱虫ということはどうの昔に自覚しているため、守ってくれる彼女というのが理想だったわけだ。

「それがまさか、今や小笠原先輩の嫁候補だとは

……理想とはうらはらに、僕にあてがわれたのは強くてかっこいい男子だなんて、それ、ただの嘘げてくる彼氏じゃないか。

いろいろと間違っている。

僕は慎太郎の真面目な関心声に否定も反論もできずに、深いため息を付いた。

小笠原組というのは、この地域に昔から我が物顔で存在する極道一家だ。先祖が有名な政治家のお偉いさんだったということもあり、我が家が三十個は入りそなでかい屋敷を拠点とし、その一方的な権力と力を振りかざしてこの地域一帯のヤクザを制圧している。

そして、そんな恐れる小笠原組の長男であり、跡取り。その名も小笠原竜人……さん。

いきなりダシにされ嫁候補にされ、何が一番やっかいだつて、同じ学校だつてことだ。存在はずつと知つていたけど、まさかこんな風に関わることになるだなんて思いもしなかつた。せめて後一年でも遅ければ、小笠原さんも卒業してて、僕も何食わぬ顔して逃げられたに違いないのに……。

ぶるぶるっとポケットが振動して、僕は喉の奥、ヒイイと悲鳴を上げた。

「お、お呼び出しか？ 愛しい旦那サマの」

恐る恐る携帯を取り出してゆっくり画面を確認する僕を見て、慎太郎が今になつてニヤニヤとからかう口調だ。

何が愛しい旦那サマだ……。

ふらりと立ち上がりつも通り教室を出していく僕の背中に、いつらつしゃいという慎太郎の呑気な声と女子のヒソヒソ声がのしかかつた。

一ヶ月もずっとこれなんて、僕の寿命が心配だ。

「遅え。寄越せ。今すぐに」

急いで教室に駆け込んだというのに、開口一番、罵られた。うおい、メールが来てから一分と経つてませんがね……というのは、到底口にしません。スンマセン、と即座に謝りつつ、用意していた漆塗りの弁当箱をサッと忍者のように差し出す。軽く睨まれ、鼻を鳴らしつつ、ぶんどられる。

小笠原さんから来たメールの文面はそれこそ「いますぐおれのもとへこい」だった。面倒ことが嫌いな性質らしく、絵文字も漢字でさえも一切使わないメールは憎らしくも男らしい。

面倒嫌いなら呼び出すなとは思うけど、生まれた瞬間から人の上に立つ存在だったこの人にとつて、命令も呼吸をすると同じらしかった。

弁当箱の蓋を開けた小笠原さんが、ぎゅうっと脛間にしわを寄せた。

この瞬間、ほんつとやだ。極道の女たるもの、夫には誠意を尽くし、身を捧げ、愛情を注がなきやいけないらしく、昼の弁当の準備までしているんだけど、これがまた。

ただのしがない男子高校生が料理とか。できるわけねえだろ。

「中身…… ハンバーアン弁当じゃねえか」

「ええ、やっぱました。

「いつになつたら本気で作つてくる気だ？ ああ？」

「すいません、だつて、僕のへたくそなおかずより「コンビニ」の方が  
みっぽどおこしく愛情に溢れてると思うんですが

「てめえは、機械より無機質な愛しか持ち合わせてねえのか？ あ  
あ？」

いやつ、そういう意味じやなくつ。

ガンッ！と、机を蹴る音に床で正座をしている僕の首がぐひいっと  
竦む。音につられてか小笠原さんのクラスメイトの視線が集まるが、  
僕にはもう慣れっこなので今更羞恥心は無い。むしろ恐怖心。

冷や汗たらたらな僕は、すぐに信用を取り戻そうと首をスポンッ  
と伸ばして渾身のネタを指さした。

「これつ、小笠原さん。」れ、見てくださいよ。これこそが僕が作  
つたものなんです。きれいにしおれ」

「これこれうるせえ」

「スンマセ」

ぐひい。

伸びした僕の指は、小笠原さんの箸で横にぞんざにこじりられた。  
その箸が摘んだのは、光沢のある深紅のバラだ。

「飴をとかして作ったんです。熱い内に形を作るのが難しくて四苦八苦しましたけど、これが一番良くなきました」

「ううして『コンビニ弁当だと怒鳴られる』とは想像の範疇だったので、言い訳のためにも準備しておいたものだ。飴細工は初めてだつたけど、溶かして形作るだけだったから意外と僕にもすぐできた。というより、指先一つ一つで見た目の味が変わってしまうのがおもしろく、ハマつて昨晩は夜通しやつてしまつた。

そんなこんなの自信作ですよ、と期待をこめた目で見るも。

「弁当に飴入れるヤツがどこにいる

「ええつ、ダメですか？」

「却下」

……らしい。

なんだなんだ。ひとに弁当作れと命令しておいて、せっかくの自信作を非常識だと突っぱねるなんて。それこそでかい器で、やればできる男だと誓めてもらわねば。僕、誓めて伸びるタイプだから。いや、何が伸びても困りそだだから良いけど。

「真央」

名前を呼ばれて顔を上げると、頬に冷たい感触がした。  
あ、来た。来た来た、いつものヤツ来た！

ガキンと氷のように体をかたくすると、小笠原さんが確認するよ

うに視線だけで辺りを見回した。「ええもう、分かるでしょ、そんなことしなくたってみんながじつじを見ていいことくらい。」

ふん、と鼻を鳴らした小笠原さんは僕の脇の下に手を入れ簡単に持ち上げると、隣の机の上に座らせた。

ヒイツ、という僕と後ろの席の真田さんの悲鳴が力ブツた。あ、ずっといたんですね、スマセン。

### 「寄越せ」

開口一番の寄越せとは違うことは経験上分かっている。いじして、机の上やり、あらうことか膝の上にまで乗せられたときには、寄越せの意味合いは変わってくる。

つまり、食べさせることだ。  
……ねえええよ。

### 「おまえの一番、どれだつて？」

「いらんこと言わなければ良かつた。これですね、ええ、と僕の震える箸さばきが深紅のバラをとらえる。いや、これをどうしようと？ 今やクラス中が僕と僕の箸の行方に注目している。これにはどれだけ経つても慣れない。慣れるほうがどうかしている。」

### 「お、小笠原さん」

「呼び方。くち、開けてやんねーぞ」

だつたら鼻にぶちこみますよ！？

……は、どうしても言えないんで。うがあーもうハー！

「つか、うそなん、はい、あーん！」

見るに耐えなかつたので、皿をつぶつてからその口元に箸」とばんなげた。

全僕の細胞が、燃えた。

「おやんな……」

苛立ちを含んだような声と、**がりごり**と飴をかみ碎く音が耳に響く。知ったこっちゃねえぞ。

だいたい、なんでこんな風にバカっぽく正しくバカな正真正銘バ  
カップルをしなきゃいけねえんだい。

僕 男おとこ！  
しゃ この場合男だからこそ目を付けられたん  
だけどさあ！

きやあ、と密かに女の子の悲鳴が上がつて、僕はウンザリ。

「マズイ」

近づいてまるでほっぺにちゅーするみたいに、囁かれた味の感想。声が聞こえていない周りから見ればそら仲むつまじいバカのつく力

ツブルに見えて「こと」だらうけれど、実体はなんて「こと」はない、ただの虚げるものと虚げられるものの関係だ。

僕の一番つって言つたそばから、けなしたよこれ！

「……いつまで続けるんですか」

間近にある小笠原さんの整つた顔立ちを見ながら、僕も小さく問い合わせる。

本当に好きあつてもいのに、他人には仲の良いカツブルだと思われるウソの関係を、だ。

こつして顔をつきあわせているのだけ、どうせ周りから見れば秘密の睦言を交わしているとも思われているんだろう。

「親父が諦めるまで、だ」

簡潔に返された答え。黒い瞳は、強い決意を宿していた。

どうしてそこまでしてして、女人との結婚を拒むんだろう？

男といちゃつくくらいだつたら、スパンツと清く正しく女性と結婚したほうがいいそ楽だと思つけどな。

と、怪訝な目で見ていたらしく、スパンツと頭をはたかれた。次を寄越せ、つて、あーもう好きにしてくださいよ。鼻の穴にでも、耳の穴にでも、好きなだけ寄越ししますとも。

## 屋敷に連れ帰られた

学校への行き帰りは、その後ろをひつそりと付き従つところのが、小笠原さんの嫁候補としての決まり事だつた。

金持ちなら車というイメージがあるんだけど、極道は違うのかはたまた小笠原さんだけ違うのか、いつも歩きだ。三十分ほどの道程、小笠原さんは顔が知れているのか常にチラチラと見られていた。うん、まあ、だからこそなんだけど、たまにこうして肩を組んだり手を繋いだりと、はたして理想の嫁像と合つているのかは別として、バカツブルつぶりを披露させられている。

「チツ」

小笠原組の極道屋敷、そのでかい木の扉に辿り着いた瞬間、忌々しく舌打ちされ手を投げ捨てられた。

おおおい、あからさまだなあ。こっちだつて繋ぎたくなーわ！  
汗でドロドロの手のひらを制服のズボンでじじじと磨き上げる。

「来い」

つて、いつもは「こ」でお別れのはずが、今日は中まで入れられるらしい。ええ、やだなあ、父さんの付き添いで入るなりともかく、この若頭と一緒にだろ？ つまり、ギンギンに鋭く注目されてしまつてことだ。

できることならパンピーのままでいたい僕。今日も平和な青空は、

前に見たときは違つてため息を付きたくなるほど重かつた。

連れてこられたはいいが、しばらく待つてると部屋に通された僕は、どうせ暇だしと縁側から庭へと出てきた。

父さんの手により剪定された縁の草木は、風通しまで計算されており虫さえ一つも付いていない。造園には欠かせない庭石や灯籠も、父さんのセンスにゆだねられ家主の満足のいく配置をされている。池から一定間隔でポンポンと無造作に置かれているように見えるが、それも計算尽くで後ろに見える景色との兼ね合もあり風情を感じさせる。さすがだ。

この屋敷は、こつして父さんの手が加えられた庭がたくさんある。というより、実質建物よりこの庭の方が大きいと言つても過言ではないと思つ。

僕もいつか、これくらいでかい家の庭を一人で立派に仕立てたい。汗水垂らして働く父さんの背中を見てずっと夢見ていたことだった。

そんな思いを馳せながら庭を見渡したとき。

いつからいたのか、ヤンキー座りをしていた三人のイカツイ男性陣と田が合つた。ひい。近づいてくるなり僕の全身をなめるように見回し、最後に「コイツがなあ」「男だな」「信じたくねえなあ」とそれもらしガックリと消えていった。

……いろんな意味で、ほんとどういつ意味。

「ここにむかは。お義姉さま、ご機嫌いかが?」

僕こそガツクリしていると、背中に今度は柔らかい女の子の声がかかった。おねえさま！？と驚いて振り返ると、そこには黒地に桜吹雪の入ったすげえ着物を着た美少女が立っている。

「はじめまして。挨拶がまだでしたわね。わたくし、小笠原魚姫といいますの」

「うお、ひめ？」

「ふふ、変な名前でしょ。竜人お兄さまの妹ですわ」

「はあ、はじめまして。篠田真央ですが」

「知っていますわ」

ひらつと蝶が舞いそうなほど可憐な仕草と声で、美少女が笑う。胡散臭いというか、わざとらしいというか、その口調も相まって不思議な感じがする。

それにして、妹さんか。いるなんてしらなかつたな。いつもこの屋敷に出入りしていたけど、女人一人も見かけたこと無かつたし。

「つていうか、おねえさまって」

「お兄さまと結婚されるのでしょうか？ 法律上まだ婚姻関係は結べませんけれど、この世界じゃ寝床を共にすれば夫婦として認められるのですわ」

ウソだろ。そんな簡単に夫婦になつてたまるか。ふふふつといふ笑い方がやっぱり胡散臭い。

魚姫さんはその腰にまで届く長い髪をふわっとなびかせ、僕の側

にまで歩み寄った。

「お兄さまの『じ』が好きですか？」

「好きっていうか、むしろそれは僕が聞きたいくらいだし」

「まあ。理由が見つからないほど盲目に慕つていらっしゃると。それじゃあ、告白はどちらから？」

「え、ええと、好きと言えと強制的に口を割らされた感じで」

「まあ。お兄さまもお人が悪い。先に言わせて恋愛の主導権を握つたのですわ！」

あれええ？ 僕、言い方間違ってるかな。変な方向に誤解されるんですけど。

兄妹とはいって、僕とお兄さまのウソのカップルを知らないらしい。魚姫さんが敵だか味方だか知らないけど、本当のコトを言つてはダメだらうか。

「お兄さまに真央さんのことを見つけても何も教えてくださらないの。まるで興味ないって言つたげに……酷いですわよね？」

「いえ、興味ないんですよ、本当に」

「あら？ 悲しいことを言つては駄目ですわ。今までお兄さまが好きだと言つ他人は一人もいなかつたのですから……今となって、それは女性ではなく男性が好きだからだと判明しましたけれど。とにかく、自信をお持ちになつて」

「は、はあ」

本当に労りの気持ちを込めて、肩ポンされた。自信持つちやうの

はダメだろ？ 僕はおかしな方向に突き進んで行くぞ。

「あのー、魚姫さんは、嫌とかじゃないですか？ お兄さまがまさか、男が好きだとこいつとは」

本当のことじやないが、共犯でウソを付いているゆえ、僕にも罪悪感。田をそろ一つと泳がせつつ、堂々とした出で立ちの魚姫さんを見るとブツと吹き出された。

「人の趣向なんて、知ったこっちゃないですわ。私は正直に男性が好きですから、他の人がどうであれひとつでもいいんです」

「自分以外、どうでもいいと？」

「ええ。それが例え実の兄であつても」

「……サッパリしてんね」

「よく言われますわ」

「ほんと羨ましいくらいサッパリしてんない。

「まあでも、お兄さまの気持ちも分からぬないですわ。組のしきたりに沿つて女性と結婚した父も、形ばかりですぐに離婚しましたから。夫婦とは儻いものだとわたくしでも思いますもの」

「そりなんだ……それは辛いね」

「そう思つてくださいます？ 優しいのですね」

「だつてそうじやなきや、男を好きだとまで言つて結婚を拒否したりしないでしょ。そんな風に考えがねじまがるなんて、そりやーも

う、考えるだけで辛いし怖い

魚姫さん、田舎者へつてゐる、あらまあ、とつぱりの  
うございた。思つてもみない反応に僕はあります。だ。

「母親をなくしてしまったことではなく、考えをねじまげてしまつたお兄さまを辛いと思つてください」

「あ、そうか、今の言い方だとそうなるね。」めんなやー、そういう意味じゃ……

「あら、別に責めてるわけじゃなーんですけどわ。偽善じやない、極道的な考え方ですね。素敵ですわ」

ぱつぱたに手を当てて、うつとうつと笑く魚姫さん。

……は、おおー、と青ざめる僕。見るからに一般ペー・ポーな僕に見える贊辞ではないよそれば。全くもつて嬉しくねえ。

一步仰け反つて風情立ちこめる庭の一部になりますとする僕の肩を、もう一度ポンされる。

「応援してますわ

一ココと、小笠原さんに齧られるのと同価値があつそうな笑みを向けられて、僕は庭の一部になつきれず、浮いた存在のまま、わざりなく頷いた。

なんだつたら、小笠原さん、この子がゴクシマにふさわしことくう。

## ファミリーに見せつけられた

僕が現実に打ちひしがれ、一人畳の上で涙し俯せていると、小笠原さんが戻ってきた。あの色気あふるる着流し姿だ。僕の姿を見るなり、何してるんだと呆れヒヤクパーで聞いてくるので、何でもないんですよとなけなしのプライドをもつてそう答えた。

「どうかズれてんだよおまえ。ネジか？ ネジねえのか？」

なんだ失礼な。そんなもんはいいから身長が欲しいですと心の中で答えた。……別に、低いわけじゃないんだと思うけど、まだ中学生だという魚姫さんと同じくらいだったたつてのがなんかシャクとうか……。

今でも見上げなければ顔が見えない小笠原さんが憎たらしいといふか。この兄妹より身長が高ければ脅しにも笑みにもすぐには屈しなかつたと思うのに。

「小笠原さん」

どこか違う部屋へと案内されながら、僕は声をかける。小笠原さんは、振り返るでもなく返事をするでもない。いつもながら他人の目がないときはトコトコそつけない。構わず続ける。

「あの、交換条件をください。」この家の人に諦めさせるまで、僕、あなたを好きなフリをします。だから、それが叶つたら、僕のお願いも聞いてくださいませんか？」

「……ああ？」

「ひいっ、だ、だつて、一方的にやれつて言われたつて理不<sup>レ</sup>理<sup>レ</sup>じゃないですか！」

「これまで黙つて従つてただろうが。何が不満だ、ああ？」

不満すぎる。今まで黙つてたのだつて、だつて、怖かつたからだ。この状況に慣れてくれるといふべく不満が募つてきた。

「あのつ、僕にも庭の手入れさせてください」

意を決してお願い事をする。

あ、立ち止まつた。肩越しに振り返つて怪訝な顔で見てくる。

「庭あ？ なんでそんなこと言いやがる」「僕、昔からこのお庭が好きなんです。おおきいし、土<sup>レ</sup>が良いし。少しくらい僕の手で綺麗にしたいなつて

「……却下だ」

「えー！ そんな無体なあ！ ちよつとだけですよ、ちよつとー。」

「うるさい。却下」

「スイマセン」

結局睨み一つで黙らされた。理不尽だ、つい。

そういうひしていのうちに辿り付いたのは、一面畳の縦長い部屋だった。何この部屋。よく時代劇とかで見る、お殿様がいるような部屋だが、その一番前、由緒ありそうな掛け軸や高価そうなツボが置かれたその前に、ドンと一人掛けの黒いソファが居座っていた。

えーなんか合わない。畳にはやっぱリザブトンだよね。

そんなことを思つてた、くいと肩を抱かれて部屋の中へと誘われる。

ギョッとした。

前しか見ていなかつたけど、中央から後ろは全て人じやん。それぞれヤンキースタイルのイカツイ男たちがあぐらをかいて座つていた。僕と小笠原さんの入場を物々しく見つめている。縁側には魚姫さんが座つていて、ヒラヒラと手を振つていて。

「な、なんですか、これ」

小声で問うも、黙つてろと言つたげに肩をギリコと潰された。いや痛え。

ソファの前に辿り着くと、小笠原さんはまず僕を座らせた。ボツフンと僕のお尻を包み込むソファの弾力の心地よさと言つたら。しかし感動している場合ではない、次に襲い来るのは、僕の膝に乗る小笠原さんの頭でした。

僕は、ソファではない……！

と、言えればどんなに気が楽だつたか。実際に口から出たのは「

ギヤツ」とかいう鳥が首を絞められたみたいなか細い悲鳴だつた。  
いや、これはどんな酷い絵面になつてゐるのか、想像するだに恐ろしい。お膝抱っことか、お手て繫ぎとか、それはまだ許容できるとして……いやできないが！ 膝枕はちょっと、かなり、洒落にならんだけ……

「おおおおおおがさわら」

「もつと可愛い声は出せないのか？」

「いやいやいやそうこうプレイをしていい場合でなくて」

「だったらどうすればおまえはその気になつてくれるんだ。人が見ているからって恥ずかしがる必要はねえだろ。いつも通り甘えてこいよ」

「あ、あまえてなんか……」

「ああ？」

誰か止めてよヘルプミー！ ダメだこの人、人に見られているときの演技力といつたらパネエ！ それほどまでに結婚を拒否したいか！

ぞわぞわと鳥肌を立てる僕をさらに追い込むかのように、小笠原さんはまず僕を下から妖しく見上げ、ベビみたに這いながらソファの背もたれに手を置いて囮つてくる。近い。本気でちゅーする五秒前。本気で茫然自失する一秒前。

「これ、何やつとるか」

オッサンたちの、固唾を呑む音やら悲鳴やら騒ぎが大きくなると

同時、ひとりわ威厳のある声が部屋に響く。

「なんだ、遅かったなジジイ。いいところで邪魔しやがって」

やつと離れた……。しかし、今度は姿勢正しく座る僕の肩を枕にしてソファに寄りかかったため距離感は先ほどとあまり変わらない。だらしなく片足をソファに上げた格好でのつそりと歩いてくる小笠原組組頭をひょうひょうと茶化す。

「何が邪魔じや。わしは認めておらんから。本気でもわしらを欺く冗談だとしても、おぬしらの関係は許し難し」

「何を言つたつて俺は決めているからな！ 結婚はしねえ。だが、

てめえの跡は俺が引き継ぐ。早くくたばりやがれってんだ」

「フンッ、簡単に譲つてたまるものか

「くそジジイが！」

ギヤー僕のすぐ側でケンカしないで。力任せに僕の膝握りつぶしてるし、小笠原さん、痛い痛い！

ジジイ……もとい、小笠原さんのお父さんは、ソファに来るなり僕らを力任せにひっぺがしてそのソファを陣取つた。畳に転がされた僕はいち早く体勢を整え、さらにお父さんと歯みつにする小笠原さんの腕を引っ張つて止めた。

「い、今ケンカしたつて無意味です。ここは穩便に済ませて、ここぞつてときに逆らいましょう、ね？ 力の使いどころを見極めてく

ださい」

小笠原さんは、舌打ちをして僕の腕を振り払つた。それ以上は黙つてくれたので、どうやら僕の言つことを聞いてくれたらしい。

後ろにいる男たちと同じように一人して座り直す。

組長も、満足したのかふんと鼻息をつくと、口を開いた。ビリや

ら、このために集められた本題が始まるようだ。

## 遭遇、そして威嚇された

話の内容は、至極簡単で。

翌日から始まる組同士の抗争の、いわば激励会だつたらしく。今となつては思い出すだに恐ろしい戦々恐々とした生々しい極道用語が飛び交い、その度に男共は奮起し沸き上がり、僕は縮上がつた。空が暗くなり、月が昇るまで続いたその集会は、宴会といつ第一ステージへと進む。

……激励会つーより、前夜祭じやねえだろつか。

僕の率直な感想は、もちろん、今日の前で広がる酔いどれオヤジたちの盛り上がりを見てのことだ。

帰るタイミングをすっかり逃した僕は家族に連絡すらままならず、じつじて手に透明な液体入りの「トップを持たされている。

「よおい、あんちゃん。どうだい、若は良い味すんのかい」

オヤジの一人に絡まれた。

「さあ……僕、まだ食つたことないんで」

「つかー！ もつたいねえな、若のあの美貌だぞ！？ おまえもタマもつてんなら遠慮せずガンガン行け！」

「僕タマなんて持つてないですもん。武器になりそなのは、剪定

バサミくらいで。だからもちろん抗争なんか参加しませんし

「なんだおまえ男じゃなかつたのかよ！？ 若も物好きだなあ。正統

派女子より変わり種を選ぶとは」

「変わり種って言つたら、僕、スイートピーとコスモスのあいの子

スイーモスが好きです。ふわふわしてかわいい子なんですよ」

「そのくせもう子どもの名前まで決めてんのか。変わつてらあ

極道の組員とも恐れることなく普通に喋れるのは、この環境に慣れたせいか、疲れてこるせいかに違ひない。断じて、この水で酔つているわけではない。

どんちやん騒ぎの中しばしばひへひだりだと喋つてると、後ろから声がかかつた。

「真央さん、お兄さまを知りませんか？」

「お、こよひ、魚ちやん」

「はい、三郎さん、真央さんに絡むのはそのへりこじてくださいませね」

僕の肩を組んでいたオヤジの手を、魚姫さんは軽くはたき落してくれた。なんだよつめてえなあ、とぼやきつつオヤジはフラフラと違う群に向かつていった。

「魚姫さん、小笠原さんいないの？」

聞いてから、そういえばずっと見かけなかつたなと氣付く。宴会

が始まるまでは僕の隣で話を聞いたり声を荒げたりとしていたけれど、みんなが酒盛りを初めてから席を立つてそのままな気がする。

「こつものことなんですけれどね。こつこつ宴会にはちつとも参加しません。騒がしいのがお嫌いですし、また一人寂しい夜を過ごしているのだとは思つんですけれど」

「ふうん……じゃ、今のうち僕帰らうかな」

「あら、薄情ですかね」

「うん、探してくるね」

ぐるんと手のひら返しをしたのは、その魚姫さんの言葉をその通りに取つたからではない。逆に、素敵と言いたげなその笑みが僕のイラン評価を上げそうだったので、回避すべくだ。

よろしくお願ひしますね、と若干残念そうに頼まれた。

とは、言え。

初めて入つたこの極道屋敷で僕がどこをどう探し探せるわけでもなく。田舎の古い家特有の板間の廊下をあてどなく歩き続けて、かれこれ。

30分。

経ちました、と。

……おい、広すぎんだよこの家……一

明かりがない中、慎重に歩いているせつもあると想つたが、だいたい似たようなふすまの部屋が並んでるのも問題だと想つ。上方の木枠の飾り穴から明かりが漏れているけど、人の気配はあるでない。

やういや、やつきのオヤジが若い衆は景気づけに外で女をどうのいつの言つてたな。もしや小笠原さんも外に出てるんじゃないよね？

本当は一つ一つふすまを開けて回りたいけど、ロシアンルーレットばかりに強面ヤクザさんがいるところを当たらうと思つと、博打の打てない小心者つまりこの僕には無理な恭當です。未恐ろしい。一つくらい前に通り過ぎたふすまからは酒ヤケと思われるガラガラ声の高笑いが聞こえてきたし、その三つ前の部屋では罵声と悲鳴がこだましていた。

聞かなかつたフリして全力で駆け抜けた僕。

こんなときでなければ歩きたいと思わないよ！？ 遊園地のアトラクションでも絶対いや！

ゴールどこだよ。

魚姫さんに、めぼしい場所でも聞いておけば良かつた……。

うなだれつつ歩いていると、少し先のふすまから人の声が聞こえきた。

今度は何だよ。頬をひくつかせ、腰を落としスタートダッシュを決め込める体勢を取つておく。

「あつ、そこは駄目だ……！」

今度は何の断末魔だとおつかなびっくりの僕の耳に飛び込んできたのは……苦しそうでそのくせ甘つたるい男の……。

なんだ？

と、耳をそばだてたのがいけなかつた。

聞こえてくる声を理解した瞬間、脳みそが沸騰しそうなほど顔が熱くなつた。

「これは、あの、いわゆる嬌声つてやつ。

きやあああ。

な、な、なにやつてんの？！

「リュウ、良いだろ……？」

それから嬌声に混じつて、低く艶っぽい声がやけに明瞭に聞こえてくる。良いだろつて、リュウつて。

「う、ええ、おー、もしかしなくとも中に居るの小笠原さん！？」

ますます何これえええ！

耳を塞いで後退つたら、後ろのふすまに背中がぶつかつた。それに体が敏感に反応してしまって、ついに腰をどうと身を固くする。

そのとき、田の前のふすまがするつと開いた。

「リュウ、また来る」

田を見開く僕の前に姿を現したのは、浅黒くて、筋肉質で、汗ばんでいる広いむなつた……って、どこ見てる僕！

つて、じつして上半身裸！

きじりと床がきしんでそれが胸板だと近づいてくるのが分かつた。ああ、ああ、見られてる見られてる。すいませんすいません。聞き耳立ててすいませんつたら。だからそんな近づいて見ないでください。穴ぼげる。

「アンタ誰だ？」

「あの、僕」

「見ねえ顔だな。もしかして、アンタ、リュウの……」

「ち、ち、ちが」

「……ふーん？」

いろいろと恥ずかしくてマトモに顔を見られず、かといって俯くこともできず、ますます近づいた胸板を凝視したまま狼狽える。すると、小笠原さんじやない、僕の顔を穴が開くほど見つめてくれちゃっている相手の男の声が、ワントーン下がった。

「顔でもないし、その体でもなきうだな」

何か、威嚇するような声色で、反射的に顔を上げる。

「オレは納得していないし、認める気もねえ」

正面を向いた僕の目の前で、波打つ黒髪が横切った。隙間から覗

く鋭い双眸が僕の目を射止めて強い光を残していった。

追いかけるように視線を揺るがした僕には、今はもう後ろ姿しか見えない。

どういう、意味だ？

「真央」

血の気が引き、身動きのとれなくなつた僕を誰かが呼んだ。部屋の明かりに照らされながら見た先では、小笠原さんが氣怠げに立つていた。

とんでもない」とされた

「これほどまでに心安らかに、小笠原さんを見つめたことがあった  
だろうか。  
否、無い。

「お、がさわら、さん……」

まるで明かりにたかる羽虫の如く、部屋の照明だけじゃない、そ  
れはそれは神々しく光っている小笠原さんを求めてふらりと体が動  
く。足より先に手、手より先に指先。

人差し指の先が、心なしか暖かい眼差しの小笠原さんに届く。

前に、手首を握られ、腰ごどぐいと引き寄せられる。

肺の空気が強く押し出され、ため息が唇から漏れた。必然的に上  
を向く形になつた僕のおでこは、小笠原さんの頬と触れあつていた。

「真央

「小笠原、さん……」

何ですか、コレは？

さらに強い力で腰をぎゅっと抱かれて、現実に引き戻された。う  
つぶに天井を見つめていた僕のまなこは、信じられなさで充血する

ほどみなぎつてきた。

なんで、急に抱き合つてんの？

すごい自然な展開でビックリしましたよ僕。

あの底冷えするような睨みですっかり肝つ玉が縮み上がつてしまい、見慣れた小笠原さんがなんだかとても安心した。根っからの小心者ゆえ、未知の恐怖に遭遇して、少しでも身近な人間に暖かみを求めたかったらしい。

それはそれとして、すんなり受け入れちゃう小笠原さんもどうなの？ すいません、あの、そろそろ首の後ろも、引っ張られたままの手首も、浮きかけの足も痛いんですがね。

「……は」

と、思つていたら、あっけなく手放された。バカにするような嘲笑付きで。

それはもう、柔らかく手放すでも突き放すでもなく、本当に興味を失つたみたいにボトンと落とされた。

全体重を預けていた僕は、そのまま重力に従つて前屈みに倒れ伏すことになった。

「な、なにふんてふか

手で支える暇もなく、そのまま顔面着地を果たしたため、口から漏れる恨み言は畳に吸收されてぐもつて情けない。

「無理だ、やつぱりおまえには欲情しねえ」

…… そんで、言つに事欠いて、それ。  
追い打ちですか、羽虫とこうよりウジ虫の如くあなた様の前にひ  
れふすこの僕に向かつて、そのセリフ。  
別にさあ、欲情されたらそれはそれで嫌すぎるんだけど…

思い出すのは、やつきの上半身裸の男だ。その人にも、なんだか  
すつごい不本意なことを言われたような気がするし。  
バカにされたというか？

顔はともかく体は関係ないだろ。僕だつて男である、プライドを  
持つて体には自信を持ちたいお年頃なのだ。

「やつきの、誰なんですか」

顔は横にずらしたものの、未だ量にウジ虫でいる僕の口からす  
たよつな声が出た。

「おまえの知らねえヤツだ」

「知らないから教えてくださいって言つてるんですけど。その、な  
んか、いかがわしそうな、人だし……」

「ああ？ まあ、あいつは正真正銘の変態だからな。…… つーか、  
おまえもこつまでやつやつてんだ。田障り」

長いおみ足で蹴られて、『うんと仰向けになる。

せつときまでの強い抱擁がウソのようなぞんざいな扱いだなコレ。本当にせつきのアレは僕に欲情するかどうか確かめてただけだったらしい。そんな方法で普通確かめるかと言いたい。むしろ確かめる意味を聞きたい。

「広い部屋ですね……」

仰向けになつたことをいいことに、『うびうびしながら部屋を見回してみる。十畳以上はありそうな部屋だが、桐箪笥、文机、座椅子、テレビくらいしかない。

殺風景だな…… ものがないのは良いけれど、まるで生活感もなければ、癒しもない。せめてもつと『うべ、花とか飾ればいいのに。

「『うべが、小笠原さんの部屋ですか？ 『うぱい同じような部屋があつたから、もう一度と来れそうにないです』

「つーかおまえは何しにやつてきたんだ。宴会は？ 終わったのかよ

「まだやつてましたけどね。僕、もう帰るところです。明日の『うとも関係ないし、いつまでもここにいたつてしようがないし

「あー、帰れ帰れ」

『ううううする僕に背中を向けて座る小笠原さん。その向かいに結構大きめの卓上薄型テレビがある。『うべ、古風な家にすんでいる割に、近代的な物が多い。

それを着流し姿で、開け放った庭の風情を感じながら見るなんて、結構雅だよなあ。

……美しいよなあ。

小笠原さんの均整の取れた体に、のぞくうなじ、開けた首もとの鎖骨が、男らしさの中に妖艶な色香をもたせている。庭では、池の水面にゆらゆらゆれる幻想的な丸い月。絵にならない方がおかしい。

魂を抜かれたように、ぼーっとの一つの情景を見つめていると、テレビの画面が急に明るくなつた。

そんで、流れ出した映像に、のぼせていた気持ちが一気に醒めた。

「先輩っ！ いや、嫌です！」

「嫌だは聞かない。おまえに拒否権はねえんだよ。いいから大人しくしろよ、たつぱりかわいがつてやるからよ」

「いや、いやーっ」

……嫌なのはこっちなんですけどおお！

ちょっと、テレビの中のそこのお二人！ 今は空氣を読んでいただきたい！ だから急に絡み合つた！ お願いだから浸つていた僕の時間を返してくれ！

てゆーか、それを何の疑いもなく流し始めた小笠原さん！？

「わやーつー 何観てんですかつー！」

リモコンを操作してこらりじこ小笠原さんの手に飛びつく。あつさり避けられた僕は、またしても小笠原さんの目の前で前のめりに転ぶハメになる。さつきよりテレビが近くなつて、一人の盛り上がりが直接耳に飛び込んできた。

憤死どころか恥死する。

「何つて、アダルトビデオだろ？ 最近はこうこうのも流行つているらしいからな」

「だから何で観てるんですつてばー！」ひにひのは一人で見てくださこよ！ ていうか何で今！？ ていうかなんで男同士ーー！？」

「さつきのは駄目だつたからな……なあ、次はどのシチュエーション試すか？」

「た、た、た、試すつて！ もしかしてさつきの聞こえてきた声も、僕にしたことある……！」

畳でじたばた暴れる僕の上に、のつそりと小笠原さんが近づいてくる。テレビの中と同じ、四つん這いの姿勢で囲われて、僕に逃げ場はなかつた。真後ろから聞こえてくる恥ずかしい声がさらに僕を追い込んでいく。

「なるほどな、抵抗されると征服してやりたくなる。おまえ、こういつの得意そーだな」

「得意も何もねえよコラー！ 来んなバカッ……すいませんどいてくださいほんとおねがいします」

「生意氣なおまえには」

「つひつ」

「「！」を「！」して……」

「やめてつたら、先輩つ」

「へえ？ やめて欲しいの？」

「ぎやああひいい……つて紛らわしい一つ一つの……」

前から後ろから誰が何だか分からぬまま繰り広げられる怪しいプレイに終止符を打つたのは、そんな僕の叫びと共に繰り出された火事場のくそ力だった。

なおも強い力で迫つてくる小笠原さんを、僕は無我夢中で後ろむきに投げ飛ばしていた。

……人つて空を飛ぶんだ、と関心している場合じゃなく。

次の瞬間、あたりに強い水しぶきの音がこだました。

「……やっぱ」

いつの間にか外されていたシャツのボタンを留める余裕もなく、恐る恐る見つめた先に、月が浮いた池に漫かる水も滴るいい男。そり、髪を掻き上げる仕草なんて、色っぽくて、なんて……。

なんて……死期を感じる。

「小笠原さん、さて、続きを致しましょうかね」

「……そうだな、今からおまえを天国に送つてやるつ

さあやあ、ガチで殺されるー。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1937z/>

---

極道の花婿くん

2011年12月20日19時51分発行